シンポジウム 9・11以後の国家と社会

討議

「絶望・怨念・監視」の登場

加藤　僕の方から大きなまとめを言ってみます。四人の方のお話から共通にいくつかのことが浮かび上がってきました。第一に、9・11は、いまや「近代世界」を支えていた基盤が大きく損なわれつつあることを、告知したということです。そのモメントとして、「絶望」「怨念」「監視」というキーワードがあげられました。この問題をどう考えるか。

第二点は、今回の話し合いの主題に重ねて言うと、「社会と国家」の間の問題です。敷衍(ふえん)して、「人間と国家」「人間と社会」の落差の問題といってもよい。例えば橋爪さんのお話で、アメリカがなぜ予防戦争を行うかという説明を聞くと「なるほどそうか」と思うのです。しかし見田さん、竹田さんの話を聞くとまた「なるほど」と思う。その間の連関、落差はどうなっているのか。単刀直入に言うと、橋爪さんの言うアメリカの行動の結果、爆弾が落ちる。するとその下には普通の人間がいる。その普通の人間が死ぬという話は、橋爪さんの話のどこに入ってくるのか。

第三点は、第一点の危機的状況をどう克服するかという今後に向けての問題です。見田さんは「関係の絶対性」から「自立」へのみちすじにその核心を見る。竹田さんは「資本主義の矛盾克服の可能性の原理」を、「自由」を軸足に「ルール社会原則の確立」に求める。宮台さんは「反米アジア主義」と言われたけれども（笑い）、これはアメリカ流の大量消費の生活様式とは「別の生き方」の範型が必要だという宮台さん流の言い方でしょう。しかし宮台さんの少々対症療法的な言い方をもっと踏み込み、原理的に言っていただくとどうなるのか。また、先の橋爪さんの国家と市民社会の監視・対立が生じるというお話は、橋爪さんのこれまでの近代社会論の基盤を突き崩すものですが、そこはどう考えられるのか。加えて、見田さんの発表をそれぞれ三人の方はどう聞いたか、見田さんは三人の発表をどう聞いたか。そのあたりのこともお話しいただければと思います。

加藤典洋氏

市民の相互監視をどこまで許容するか

橋爪　普通の人が死ぬことをどう考えたらいいのか、そして、国家と市民社会が対立したらどうすればいいのか、この二つについてお答えします。

普通の人が死ぬことは、もちろん避けなければならないことなんですけれど、それにも形態がいくつもある。テロリストが普通の人を殺す。全員を殺すわけではなくて、大勢の中から無差別に一部の人を理由なく殺すと、そのことによってパニック、恐怖が起きます。その恐怖を引き起こすことで、政治的な効果を収め、できれば要求を認めさせる、これがテロリストの狙いです。

これを認めてしまうと、特別な主張をする、決して多数を代表しない小集団が、大きな政治力を持つという不正義を認めることになるので、テロは、政治としてはルール違反なんですね。ですから、これには反撃しなければならない。テロ行為を失敗させることが、それ以上のテロ活動の続発を抑止し、結果として普通の人びとが死ぬことを防ぐ道である。このように誰でも考えているし、テロとは戦わなければならない。テロにも理由があるという話はまた別で、それはほかの

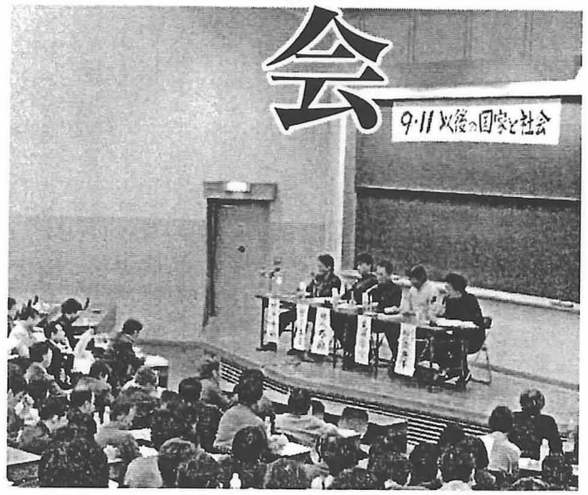


photo 広瀬明代

方々が十分お話しされました。

二番目の問題ですが、国家と市民社会が対立する場合。もしも犯人が国内にだけいるのなら、通常の国内の法律で取り締まることができますから、法律体系としてはそんなに問題がない。けれども、犯人が国際的にネットワークを張っている場合、ある国がその市民の安全を百パーセント守ろうと思うと、外国でも軍事活動や警察活動をしなければならない。そこでその外国の主権を侵害する状態が生まれます。外国の人びとの人権を抑圧するということにもなる。外国も同じことをすれば、いわゆる監視――市民がそういうことをやってくださいと頼んだ以上のこと――を政府がやることになりますから、国家と市民社会の間に緊張状態が生まれてくると思います。

この問題は非常に難しい。要は、市民の相互監視を、市民がどこまで認めて許容するかということだと思うんです。市民は忙しくて相互監視をしている暇がないので、それを政府に頼んで代行してもらう。これは、民主主義社会の中でもできることだと思います。では、どの範囲までが許容でき、どこから先が許容できないのかといえば、取りあえずそれはその市民が決めるしかないのではないか。論理的に考えると、これ以外に答えがないです。ただ、今後起きるテロの可能性をどれぐらいに見積もるかによるんですけれど、これまで以上に監視の能力を強めないと、つまり市民の自由を制限しないと、テロは抑止できないだろう。

システムへの適応不全は悪か

宮台 基調発言で端折った原理的な部分を補足させていただきます。先には橋爪さんに絡めてお話ししましたので、ここでは主に見田さんに絡めてお話しいたします。

僕の話の主題は「システムに対する適応不全は悪なのか」でした。この点を補足します。近代とりわけ資本主義のシステムに適応することが、なぜ自明に良きことだと考えられてきたのか。答えは〝システムに「外」があったから〟です。それは家族共同体だったり、地域共同体だったりしました。これらの「外」にとっての利益がもたらされると感じられたので、システムへの適応が良きことだと考えられたのです。

ところが資本主義のシステムが展開するにつれて、家族共同体の諸機能は次々と社会化され、システムによって提供されるようになります。地域共同体も、戦後の郊外化で急速に空洞化し、機能的でコンビニエントなシステムモジュール（交換可能な部品）に置き換えられる。その結果、システムの「外」にある家族や地域にとっての豊かさや便利さが増すからといった理由でシステムを正当化することは、困難になってきます。家族も地域もシステムの機能的な一側面にすぎなくなるからです。かくしてシステムの良し悪しを判断する評価軸の

宮台真司氏

原点が失われていく。それでも「私」が幸せになるからという理屈が残りそうに見えます。でも家族や地域といったシステムの「外」が失われた後に残る「私」とは何なのか。コミュニタリアン（共同体主義者）の憂うるように、単なるリレー・スイッチのごとき、システムの入れ替え可能な操作項にすぎないのではないか。だとすれば「私」ですらもシステムの機能的な一側面にすぎなくなります。

かくして、システムに「外」がなくなると、システムへの適応の良し悪しを判断する物差しが消えてしまいます。基調発言で触れましたが、アメリカの精神医学会は、パーソナリティー・ディスオーダー（人格障害）について新見解を出しています。第一に、人格障害が郊外化の歴史と並行して出現したこと。要は、「良き家族」のメディアイメージに煽られた揚げ句の適応不全が生じ、この適応不全的な家族関係における子供の側の心理的解決がパーソナリティー・ディスオーダーという形を取ったのだということです。

加えて、第二の論点があります。先の席巻するメディアイメージをも含めた郊外化のシステムに適応することが、果たして健全なのかどうか。むしろパーソナリティー・ディスオーダーという形で適応不全を示すことこそが、健全さの証しなのではないか。あえてシステムに適応すべしというのなら、立論の根拠を示す必要が出てくる――うんぬん。

精神医学は従来、社会システムへの適応不全について、適応不全を起こす人格システムの側を問題にしがちでした。最近では社会学のように、社会システムに対して疑問を呈するようになってきた。いい傾向です。でも知識社会学的にいえば、近代システム自体に正当性を与える物差しに揺らぎが生じてきた徴候です。これは世界各国に共通の問題であると同時に、基調発言で紹介したアジア主義が、近代それ自体の正当性を問題視する構えにおいて先見的たるゆえんです。

主流学説が一変した米憲法学会

もう一つ、国家と社会の問題について語り残しています。9・11以降、アメリカの憲法学会は主流学説が百八十度変わ

りました。従来は、皆さんがご存じのように、「疑わしきは罰せず」あるいは「百人の罪人を放免するとも一人の無辜（むこ）な民を刑することなかれ」という刑事訴訟法的な原則に象徴される憲法観が支配的でした。そのエッセンスをひとことで言えば、「危険なのは社会よりも国家だ」という概念であり、ホッブスの「リヴァイアサン」という観念によって象徴されます。

ところが、9・11のテロを契機に、アメリカの憲法学会で「危険なのは社会よりも国家だ」との観念が、「危険なのは国家よりも社会だ」という観念によって取って代わられました。先の物言いになぞらえれば、「百人の無辜の民を拘束するとも一人の罪人を逃がすことなかれ」へと変化したんです。

これで僕たちが思い知った事実があります。基調発言で述べた近代的公共圏の話ともつながりますが、従来のリベラルな近代的憲法観なるものは、ある前提の上に成り立っていたということです。社会は信頼できる。あるいは知らない人間は信頼できる。そういう信頼の上に成り立っていた。だからこそ、その信頼が当てにならなくなった途端に、近代憲法の見本たる合衆国憲法を持つ国の憲法学会が、学説を百八十度転換したわけです。アラブの人たちを令状なしで拘束し、裁判にもかけずに長期拘留する現実を肯定してしまう。

確かに公安問題と同様、社会よりも国家が危険だとのドグマに固執し、事実として危険な社会を、放置すれば、社会契約の当事者である社会が崩壊し、立憲制も何もなくなる。その意味で、緊急避難として憲法外的な措置を正当化する学説転換を容認できそうに見えます。でも、それが本当に公益に資する緊急避難なのか、緊急避難のふりをしつつ特殊権益に奉仕する施策なのかを識別する方法は、憲法内にない。統治権力を市民が監視して憲法というルールに従わせるという要求が、括弧に入れられてしまっているのは恐るべきことです。

誰を「人」として認識できるか

しかしそれとは別に、いま申し上げた憲法リベラリズムそれ自体の限界も、リチャード・ローティによって語られている。アメリカが国外でいかに多くの民間人を虐殺してきたかはチョムスキーを待たずとも常識ですが、国内でも何をしてきたかを思い出しましょう。アメリカは合衆国憲法修正十箇条によって人権を守る国だなどと思っている方はどうかしています。一九五二年のアカ狩りの時は共産主義者に人権はなかった。六五年のベトナム北爆直前に黒人の戦争動員のためにジョンソン大統領が公民権法に署名するまで黒人に人権はなかった。9・11以降のアラブ系に人権はない。かつての男に対する女性もそう。修正十箇条がいかに崇高な人権理念を掲げても、男性アングロサクソン以外に人権は適用されない。すなわち人ではなかった。これがアメリカの歴史です。

要は、我々が誰を「人」として認識できるのか。これは法律

の問題でも哲学の問題でもなく、実践の問題です。だから、「暇人は哲学をやれ、志あるものは感情教育をやれ」とローティは言う。先にリベラリズムの本義は、立場の入れ替え可能性の確保だと言いました。立場の入れ替え可能性の必要をどの範囲に想定するのかについて感情のベースを書き換えるべく、コミュニケーションを通じて日々実践せよ。これがローティのプラグマティズムです。ポストモダン・フェミニストやラディカル・デモクラットを踏まえた議論です。たとえ制度的な人権や自由を公的に保障しても、人権や自由を用いて人がどんな私的実践を行うかは指定できず、人権や自由を保障する制度の下で抑圧的な実践がありうる。だからといってリベラリズムや合衆国憲法に敵対するポストモダニズムは愚かで、リベラリズムを踏まえた実践あるのみというわけです。

立場可換性には必ず一定の範囲がある。その意味でリベラリズムには外部があり、近代には外部がある。その外部は絶対に消せない。まず、消せないことを自覚し、次に、消せない外部をできる限りミニマムにすべく「実践」する。それが、暇人の哲学問答や社会学問答と区別される、真のリベラリストがなすべきことです。かかるテーゼは、竹田さんの語る哲学的な原理原則に比べて脆弱に感じられるかもしれません。しかし脆弱なのはむしろ、そういう哲学的な原理原則の上に立てられた近代的な諸制度の方であり、それに対処するには先のリベラリスト的実践以外にありえないでしょう。

見田先生が「正しい勝ち方」とおっしゃる。その「正しい勝ち方」は、アンソニー・ギデンズというイギリスの社会学者の言うインクリュージョン（包摂）と近い。第一に、リベラリズムの外部や近代の外部ができるだけミニマムになるように内部へと取り込み、近代社会そのものへの敵対動機が醸成されないようにする社会政策的な観点において。第二に、我々が立場の入れ替え可能性の範囲として想定するものができるだけ広くなりうるようにする教育実践的な観点において。巷で思考停止的に語られるギデンズ＝新しい社民という図式を超え、リベラリズムの本義にかかわる提案がなされていると見るべきです。

ただ残念ながら、ブレア政権のブレインでもあるギデンズは、アメリカのアフガン攻撃に際して「テロリストは近代社会に脅威をもたらすので、国際社会は連帯して断固武力で対処せよ」と主張し、読売新聞にも掲載されました。僕は腰を抜かした。基調発言で述べた「法的意思の貫徹」と「社会政策的な実践」のバランスという問題が看過されているのもありますが、「ギデンズよ、お前の言う『包摂』って何のことなんや」と頭を抱えた（笑い）。近隣のナチ的政権に軍事的に対抗することこそが反ナチ的だとしたハーバーマスの独軍コソボ出兵支持とは事情が違い、9・11の背後にある政治的怨念については、リベラルな先進社会にこそ責任があるからです。ギデンズはリベラリズムの本義に関する無知を暴露しました。

人間の歴史は長い列車

竹田　見田さんが言われた貧しい国と豊かな国の双方の「自立性」についてですが、異論というのではなく、一つ考えておくべきことがあると思います。それはグローバリズムということにかかわります。グローバリズムというのは要するに、自由競争の原理が徐々に世界大に拡大することですね。世界全体が自由競争に組み込まれる。しかしそれは、個々の国の条件にでこぼこがあるからどうしても先進国有利な競争になる。あとから参入する方にしわ寄せが集まり、ひどい矛盾や格差が出てくる。そこでグローバリズムの趨勢に対して「自立性」というプランが出てくるのだと思います。僕も考え方としては反対ではない。しかし、一つ重要なことがあって、それは自由経済の進展を、貧しい国の人間自身が必ずしも拒否しているわけではないということです。

竹田青嗣氏

　というのも、僕は在日韓国人二世なのでこれについてある感度があるのです。一般的にマイノリティー社会の人間の側から向こう側の豊かな世界がどう見えるか。そこに何があるか、もちろん多くの矛盾も見える、しかしそれ以上に新しい生き方の可能性が見える。特に若い人間にとってその可能性は、強い切望になる。それまでの伝統的生活が競争原理に巻き込まれて世代間の矛盾も起こる。しかし、にもかかわらず、多くの人間が新しい生活の可能性に強く引かれる。それは虚妄だと言ってもむだです。なるほどこの欲望は倫理的なものではない。しかし誰もそれを非難しえない自然な人間の欲望です。そして、この切望こそ、歴史的な資本主義の拡張性の根本動力であって、資本主義は無理やり移植されてきたのではない。そのことを無視してはいけないわけです。我々はつい、その欲望は実は幻想でむしろ古い生活様式の豊かさを見直すことが大事ではないかと言いたくなる。でもそれはすでによい場所にいる人間の見方にすぎないことが多いのです。

　いま、人間の歴史というのはものすごく長い列車が進んでいるようなものです。一番先頭の列車にいる人間は豊かで、むしろ自由がありすぎるのが苦しみの大きな原因であるなどとも言われている。でも一番シッポの方の列車では、まずひどい困窮があり、また古い制度や因襲に固く縛りつけられて最も基本的な自由さえ持てずに苦しんでいる。この落差があまりに大きいために先進国の人間の悩みなどは贅沢なものと思え、また一方が他方の苦しみをつくり出している原因であるかのように見える。両極は対立的なものであり、そういう人間社会のシステム全体が悪いものだと考えたくなる。

　しかしそうではないと思います。いま世界は長すぎる不公平な列車になっているが、しかしそれが進んでいく方向自体には大きな必然性がある。後ろの方にいる人間は少しでも前の方に進んでいきたい。前にいる人は豊かさゆえの不幸をかこっているが、それでも後ろの車両に戻りたいという人は決していない。それが、人間がより「自由」でありたいという本性を持つということの意味です。ですから、我々はつい何かが根本的に間違っているのだと考えたくなるし、個別的にはその通りだけれど、むしろこの列車の方向性の本質をよく自覚し、そこから大きなビジョンを立てるのでなくてはいけない。そこで初めて個々の現実的な目標が可能となる。

社会をルールゲームとして積極的に自覚し直す

　それで僕の考えの基本形は、社会をルールゲーム（ルール原則社会）として積極的に自覚し直すということです。社会とは、個々の成員以外にはどんな超越項も存在しないルールゲームと考えること。これが一つ。もう一つは、社会内のゲームは一つではなく多数でありうること。これまでの社会は例えば武力のゲーム、権力のゲーム、マネーゲームという、たいていは一つの中心的ゲームになっていた。これを多様化する方が社会ゲームとして望ましいということ。これが基本のコンセプトです。

　この問題を少しつなげて言うと、いま宮台さんがローティの話をされたけれど、アメリカの社会学には、ポストモダン思想と違って新しい社会構想の思想が少しずつ出てきた。ローティのほかに、『正義論』を書いたロールズとか、最大限個人の自由を尊重する自由主義（リバタリアニズム）のノージックなどがいる。ローティの「入れ替え可能性」、自分が相手の立場に立ったとしてもそれを納得できるかというプランは、ロールズの、人間が「ヨーイドン」で生活を始めるとしてどういう初発のルールが正義の「正当性」になるかという発想とほぼ似ています。ノージックも、国家の「正当性」を似た形で設定している。社会構想の試みとして基本的には評価しますが、しかし僕の考えでは、ローティやロールズほかのプランは基本的にやや理想的だと思います。

　近代哲学にはこういう社会構想の長い歴史がある。近代社会の社会正義の規準を初めに言った代表選手はロック、次に

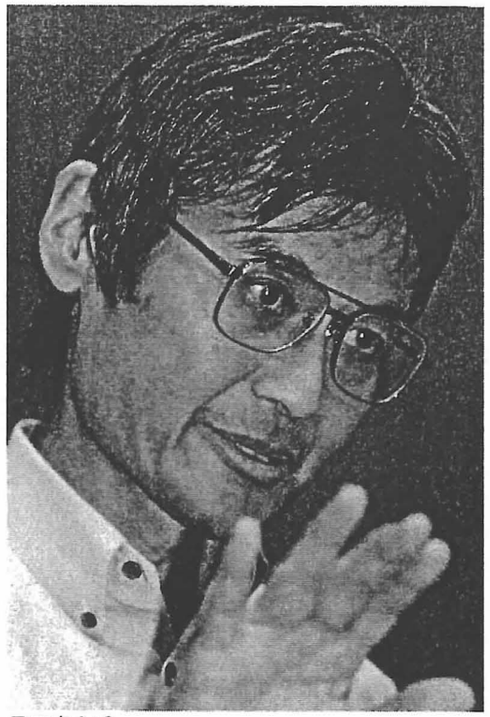
ルソー、それからカントです。彼らの考えの基本は、人間はみな自由で平等だという前提であって、「入れ替え可能性」や始発点の契約説はこの前提に立っている。しかしヘーゲルは、これらの考えはまだ理想化された理念から抜け切っていないと考えた。単なる自由と平等の想定ではなくて、自由の「相互承認」という考え方が決定的に重要だと考えた。このことでどういう重要な変更が生じるか。一つは、社会は、特定の理想的理念を「正義」の規準として持つ（カントがその典型）ものではなく、自由な欲求のフェアなルールゲームであるということ。そこで生じる矛盾はルール変更の形でつねに克服されうる。もう一つは、始発点からのフェアな純粋ゲームという考え方が排除され（社会主義の考え方が典型）、社会はつねに、すでに何らかのルールゲームであったことを認めるわけです。まったく新しいゲームは悲惨な犠牲なしには不可能であり、したがって既成のルールゲームの既得権は一定認めつつ、しかし大多数の合意によって社会のルールゲームをつねに、より不合理や不平等を少なくしていく、という考え方になる。詳しく論証できないけれど、そこから見るとアメリカ社会学の政治理論は基本的にはロック、ルソー、カントの原則でしか社会「正義」の規準を取り出していないというのが僕の考えです。その先まで進む必要があると思います。

これは哲学的議論で机上の理論と見えるかもしれませんが、例えばいま多くの人が資本主義の克服ということを考え、そこで様々な意見、プランが出ている。その多様な意見の基本形を取り出し「可能性の原則」を明確にするのが哲学の重要な役割の一つだと思うのです。

社会は各人が対等の権限を持ったルールゲーム

そこで誤解を恐れずに言えば、社会は各人が対等の権限を持ったルールゲームであるという考え方が哲学的にはおそらく一番先に進んでいると言わざるをえない。人間社会からこれまで存在していた超越的権威をすべて取り払い、個々人を尊厳を持った自由な単位と考える限り、唯一残る社会の考えはこれだけです。この考え以外には近代社会が準拠できる考えはどこにもない。そう僕は考えます。もちろん、現実の社会は到底そんな状態ではなく、でこぼこや矛盾に満ちている。しかしこの考え方の基本形だけが、現行の社会のでこぼこや矛盾を最も本質的な形で批判できる根拠となるわけです。

これが最も原則的な考えだという理由をひとことだけ言いますと、これ以外の規準的な社会の考え方は、実はそう多く残らない。教義権力の社会では神が超越項です。近代的国民国家では、幻想的な一体性や救済思想が超越項です。超越項はほかにもいくつかある。しかし超越項をすっぱり取り払えば、もうフェアなルールゲームという考え方しか残らない。


見田宗介氏

人間は、現実には、もともと自由なのでも平等なのでもない。しかし万人ができるだけ自由であり平等でありうるようなシステムは、社会を「自由の相互承認」を前提としたルールゲームとしてつくり出す時にその可能性が最大になる。これが第一の原則です。もう一つの原則は、もし社会ゲームが単一のゲームに貫かれている場合、その社会では、人間的な価値（善悪、美醜、真偽）が必ず逼迫するということ。極端な思想に一元的に支配された独裁国家では、人間生活が必ず持っている良し悪し、美醜の秩序は公的な「正しさ」と完全に背反的なものになってしまう。これは最悪です。マネーゲームだけが人間の一元的価値になる場合も同じです。社会は多様なゲームが共存しうるシステムでなければならない。

つまり、近代の社会とは、万人がそのゲームのうちで生きることを肯定できるゲームでなければならず、肯定できない場合は必ず大きな合意によって根本ルールを変更できるようなゲームである。またそのゲームは、支配的な中心ゲームだけではなく、多様な人間の多様な生のゲームを共存させる原理を持たねばならない。ともあれそんなことで、哲学の思考としては、まず大きな進み行きのビジョンを構想する必要がある。そういう合意を作り出すことがいま何より重要で、そのことで初めて具体的な目標が立ち、その可能性が人びとの変革への欲望を引き寄せます。そういう場面で今度は社会学者の役割が極めて重要になるのではないか、とまあ哲学者としては思うわけです。

法学的正しさの限界

見田　四人の方々のお話をうかがっていて考えたことを少し述べます。問題の中心にいきなりぐさっといきますと、要するにテロリズムというものをどうやってなくしたらいいか、どうやって克服できるかということが当然問題の焦点だと思うんです。テロリズムというのは全くひどいルール違反ですから、これは殺人罪を適用して厳しく処罰しなくてはいけないという考え方があるわけです。それは正しい。その通りで、

ルール違反のものを放っておいたらルールは成り立ちませんから、全く正しい。正しいということは、「法学的」に正しい解決なんです。

しかし今、9・11以後起こっていることは、処罰するぞと言っても、処罰を恐れずにテロをやる人間がいっぱいいて、それはどんなに重い死刑にしても、つまり自爆するつもりなわけですから、現実にそういう人が出てきてしまうわけです。ルール違反だから徹底的に処罰しろというのは正しいのですが、それは法学的な正しさであって、そうしたからといってテロはなくならないのです。いくら処罰してもなくならない。パレスチナを見ればわかります。それをどう解決するかということが社会学の課題なのです。それはとても難しい課題ですが、やっぱり社会学の方はそこから逃げるわけにはいかない。

それからもう一つは、似たようなことですけれど、例を挙げると、例えばテロリズムと戦争は違うと。ブッシュのやったことは宣戦布告もあって、いわば合法的な戦争であるということも、実は正しい。つまり、暴力というものは国家だけがふるってもいいというのは、国民国家の原則です。法学的にいえば、テロリズムは悪いけど、国家はテロというか、暴力をやってもいいんだということは、やっぱり正しいんです。国民国家の原則で今の法学はできていますから、暴力をふるっていいのは国家だけなんだぞという原則が大前提になっている。

だけど、そのことが実際に社会的に実現するには、あるいは行われるためには、市民がそのことに納得しないと、ちょっと嫌だけどやっぱり納得するよということがないと、それは実際に成り立たないわけです。それに納得しない人間、特に激しく納得しない人間を大量に生み出してしまうような社会（世界社会の構造）というものがいま現実にあるということを、まさしく今度の事態は示しているのです。これはやっぱりどこかおかしいわけです。そういう世界社会の構造というものをどうやって変えていくことができるか。それを考えるのが社会学の課題です。

加藤　見田さんから社会学的な課題が示されました。それへの対案というか、感想も含め、今度は先のそれぞれ皆さんの発言に対するご発言をお願いしたいと思います。

橋爪　竹田さんと見田さんに私から疑問点を述べてみます。

竹田さんは、具体的な理念ではなくて、ルールを大事にして、ルールに問題があれば一人一票でそれを変えることができる、これが希望であって、これを共通の認識として社会と国家を形成すればテロのようなものは起こらないという感じで述べられました。私は、基本的にそういう考え方なので支持するんですが、しかし9・11以後の問題は、この問題設定を超えていると思うんですよ。

どうしてかと言うと、国際社会にはそういう共通のルールがない。国際法があるけれど、それは国内に通用するものではないわけです。そして一人一票の政治システムは、近代国家の内部ではかろうじてあちこちに成立しているけれど、国際社会にそういうものが成立しているわけでもありません。ですから、国際社会の中にある矛盾を解決するアイデアとして、一番優れたものはルール主義であろうけれども、それでは解決ができないという問題があるんです。見田さんがおっしゃっている、テロをなくしていく社会学的課題は、このルール主義プラス何かがあるんじゃないかという指摘だったと思います。

次に、見田先生についての私の疑問は、今日のお話も大変おもしろかったんですけれども、しかし、「収奪」とか「抑圧」とかいう言い方がありました。圧倒的な不合理とか不平等とか、そういう感覚は、私たちの間でリアリティーを持っているということは私もわかるんですが、それを「収奪」とか「抑圧」と簡単に呼べるのかどうか。マルクス主義はそういうふうに呼んできたわけですけど、これは簡単にそう言えないと思います。

例えば人口を考えてみます。今、六十五億の人口がいます。これは、先端的な工業力がなければとても支えられない人口です。もし伝統的な社会だったら、地球上は数億でいっぱいなわけですよね。すでにこうして存在している人たちの、生命、財産、人権を保障するシステムは、先端的な工業力、つまり先進国の協力がなければ不可能なわけです。第三世界はそういう意味で、先進国に依存している。その象徴がアメリカだとすれば、アメリカが存在しなければ第三世界は存在できないわけです。つまり、搾取しているとか抑圧しているという以上に、まず相互依存していて、一つのシステムになっているんです。その相互関係から、マイナスの部分だけをきれいに切り取って、収奪とか抑圧とか呼ぶことには概念上無理がある。ですから、宮台さんが言ったようにアメリカ、先進国に適切に行動してもらう、我々が懸命に行動するということを、具体的に考えていかなければ、その搾取とか抑圧という用語では、ちょっとスケッチとして粗いのではないかというのが私の直感です。

橋爪大三郎氏

あと、アメリカというものを考えてみたいんです。アメリカという国が生まれるのには必然があると。なぜアメリカが現在覇権を握っているのだろうか。それは新大陸にいるからです。産業革命は旧大陸で起こりました、今までの文化、伝統、蓄積が必要ですから。でも新大陸という空いた場所があって、そこに工業技術を移転し、人間が移転すると、一人当たり、膨大な資源を使うことができるので工業を発展させるのに大変具合がいい。しかも旧世界のいろんなしがらみがないと。そこで旧世界は負けていくわけです。

旧世界とはヨーロッパであり、イスラムであり、ロシアであり、インドであり、中国であり、一つにまとまれないし人間も多すぎるんです。ですから当然、一歩遅れていく。日本もその中にあります。こういう地政学的な状態がしばらく続いていくわけです。そうすると当然、アメリカが最も自由で世界の文明をリードし、そして軍事力も強大で世界の秩序の安定に寄与する。旧世界の中にはいろいろな矛盾があって、すぐ対立しますが、結局アメリカが介入しないと平和が維持できないという現実があるわけです。

これは残念ながら現状なので、これをひっくり返しても、ろくなことがないわけです。ですからこれでいくしかないんですけど、しかしそれが矛盾を生産しているという面もあるわけだから、そのアメリカに対して日本の立場から、いろいろと介入をしていくという、現実的なやり方を積み重ねていく。このプラグマチズムは、オポチュニズムと違って、こういうバランス感覚です。アメリカもだんだん地盤沈下していくわけですから、長期的な視野を持って、そのつど、そのつど最善の手を打っていく、こういう蓄積が、時間はかかるけれどもテロリズムに対する一番現実的な方策ではないか。

「力と美」岡倉天心の図式をめぐって

宮台　中国や朝鮮半島の方々にとって、日本のアジア主義は悪夢でした。なぜ悪夢を来したのかを理解することは、今日のアメリカのあり方を考えるのに役立つので、「力と美」という岡倉天心の二項図式を使って概念的に説明します。

彼の図式は「西洋列強は文字通り力を持ち、力なき東洋は美を共有する」というものです。各地を歴訪してアジアの多様性を知り尽くしていた彼のことですから、廣松渉が西洋的アトミズムにアジア的関係主義を対比させたのと同じで、美の共有うんぬんは、外部の力による脅威を前提にしたネタです。その意味で、社会学的にいえば、同一の力に抑圧された弱者たちの感情的な共通前提のごときものです。「力に抑圧されたる弱者は、美によって連帯し、力の獲得に向けて自らを鼓舞すべし」。わかりやすくいえばそういう図式です。

ところが、とりわけ日露戦争以降の歴史には「力と美」をめぐる逆説的事態が見てとれます。主に二つある。第一に、戦後を見ると、我々が力を獲得して弱者でなくなった結果、弱者としての感情的な共通前提を失い、三島由紀夫が憂えたごとく、擬似的にせよ何にせよ維持されてきた共同性が潰えます。拙著『まぼろしの郊外』に書いた通り、似た問題は随所にあります。強いられた弱者として「核抜き本土並み」を目指してきた沖縄は、とりわけ九〇年代以降、単に本土並み化して力を獲得するだけでは美を失ってしまうとの意識を共有するようになります。在日コリアンの世界でも、単に日本人化して力を獲得するだけでは美を失うとの意識が出てきている。被差別弱者ゆえに「快楽の共同性」を有するゲイは、それゆえに、レズビアン&ゲイ・パレードのごとき熱い祭りができて、それが異性愛者にリスペクトされ、ゲイの力の獲得に資するところ大ですが、このまま異性愛者並み化すれば、いずれは祭りの前提たる「快楽の共同性」が失われます。

そこに第二の問題がある。力の獲得にかかわらず美を維持する方策、ありやなきや。あります。力の獲得にもかかわらず自らを弱者として規定し続ければよい。ところが、それこそ、そもそもは岡倉天心的な弱者の思想だったアジア主義が、帝国主義的な大陸進出の翼賛思想に成り下がるプロセスそのものなのです。一九四三年の重光外相の大東亜憲章に象徴されるようにアジア主義が悪魔の思想に変じたゆえんです。すでに力を獲得せし者が、弱者たる過去の記憶にしたがって美的に自らを鼓舞する国粋の営みのいかに恐ろしきことか。それがまさにアメリカそのものなんですが、その前に、イスラエルを見ましょう。

イスラエル人は中東戦争といえば、エジプトにめちゃくちゃやられた第三次中東戦争を思い出します。イスラエルには、遡ればホロコーストの記憶があり、さらに遡ればヨーロッパのキリスト教徒によるユダヤ迫害の歴史的記憶があります。東欧崩壊後も、差別されていた大量のユダヤ人がイスラエルに移住し、イスラエル右派を形成します。彼らはいまも自らが弱者であるとの意識を強烈に抱き、自らを美的に鼓舞する。しかしどうでしょう。いまでは弱者どころか、むしろ強者ではないのか。

すでに力を獲得せし者が、弱者たる記憶を手放さないことの恐ろしさといえば、かかるイスラエルのあり方こそがまさにアメリカの写し絵です。全米ライフル協会やミリシアの戯画を見るまでもなく、この国は今でも連邦派と反連邦派の対立構図を引きずる。百四十年前には親族や友人が南北に分かれてゲリラ戦で殺し合ったことを思えば、国をなすこと自体が奇跡的です。この奇跡は、南北戦争を挟む米英戦争や米西戦争、遡ればピルグリム・ファーザーズの迫害記憶やネイティブ・アメリカンによる襲撃記憶など、やはり弱者たる記憶に支えられます。その意味で、列強にやられないよう仕方なく親の敵と結束した維新期の日本を彷彿させる。すでに力を獲得せし者が弱者たる記憶にすがる滑稽さは、マイケル・ム

ーア監督のドキュメンタリー映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』（来年一月に日本公開）に活写されています。

弱者たることを動機づけのリソースとして利用する強者の恐ろしさについて、もう一つ重要なことがある。各種の映画の主題になりましたが、なぜ日系人やネイティブ・ナバホが星条旗の下での兵士たらんと欲するか。これは被差別者の運動が、黒人の公民権運動にしても、女性のフェミニズム運動にしても、少なくとも当初は合衆国憲法を自らにも適用してくれという形式をとることに関連します。逆にいえば、合衆国憲法の適用を受ける恩恵はそれほど大きい。だから、自分たちも人権ゲームに混ぜてくれとの運動が起こると同時に、他方で、混ぜてやってもいいが星条旗のために死ねるのかという形で「踏み絵」を踏ませ、戦争動員してきたわけです。

かくしてアメリカは、弱者たる記憶や自意識を利用して、内部的な結束や外部への動員を図る、長い歴史があります。これをどう解除するか。解除に至らなくても、「強国になった弱者」「強国の中の弱者」の思考停止的な突進を、いかに抑止するのか。それが二十一世紀の重要な課題になっている。その意味では、かつて原型的弱点をさらしたアジア主義は「強国になった弱者」の問題を、宮崎学が『近代の奈落』（解放出版社）で描いた水平運動とアジア主義的動員の関連は「強国の中の弱者」の問題を、すでに教訓的に示しているわけです。

新しい社会運動とは何か

暗い話ばかりでしたから、最後に明るい話をします。先日の9・11メモリアルでいくつかのNGOイベントがあり、僕も参加しました。これらは新しい社会運動です。新しい社会運動とは何か。旧来の運動は、剥奪された弱者が自らの回復を求めて立ちあがるか、近隣の弱者に連帯するタイプでした。新しいタイプの運動はそれとは違う。ちなみに僕たちの社会は旧来の運動では解決できない課題を多数背負います。

例えば環境問題。かつてと違って、フロンガスによるオゾン層破壊にしても、遺伝子操作作物によるエコロジカル・システムの攪乱にしても、僕たちが被害を受けるというより、子孫たちの問題です。僕たち自身は食い逃げやヤリ逃げができる。同じく、例えばグローバリゼーション。ハンバーガーを六十円で食べる時に地球の裏側で何が起こっているのか、ふだんの生活で意識する機会はない。テロが起こってさえそういう問題を想像できない輩が大半です。

僕たちは弱者というよりも、見えない場所の見えない人間たち、あるいは遠い将来の子孫たちに、理不尽な思いをさせる強者なのです。ちなみに見田先生の『現代社会の理論』は空間的・時間的に遠隔の人間を思うべしとの当為が不可能なことを前提として、遠隔の人間たちに負担をかけないシステムを構想し、設計する可能性に、賭けようとします。

ところで、かかる当為とは別に、決して会うことのない子孫や南側の人々に理不尽な負担を強いるシステムにタダ乗りするのでは枕を高くして眠れないとか、内心忸怩（じくじ）たるものを抱えては生きられないと感じる者たちが、自分がシステムの入れ替え可能なリレー・スイッチになりゆくことを拒否する心情を実存的に抱えつつ、社会運動する動きが出てきます。

それが新しい社会運動です。その動機づけは、弱者の自己回復ではなく、近隣弱者への連帯でもなく、エゴイズムを放棄すべしとの当為に応えるのでもなく、強者たる者の実存的理由――まさにエゴ――に発します。現実には、かかる者たちによる公共性の模索行動なくして、グローバライゼーションの逆機能問題に対処するのは不可能になりつつあります。皮肉にもこうした動機づけはアメリカでこそ量産されます。

近代を相対化する視界

見田　橋爪さんの批判にお答えします。「収奪」とか「抑圧」という言葉を僕が言うのは、スケッチとして粗いのではないかというご批判は、正しいと思います。まことに粗いんです。ただなぜ粗いかというと、この収奪や抑圧の構造をここで改めて言っていると長くなるので省いたんです。現代世界の「繁栄の都」による「飢えた半分」からの収奪は、直接に人格的な収奪ではなく、経済構造や権力構造を通しての「システム的」な収奪ですから、「リアリティー」を人間が持ちにくい仕組みになっていて、そのメカニズムをきちんというとどうしても長くなるのです。『現代社会の理論』の第三部では、そのことを具体的な例に即して、理論的に書いておきました。「抑圧」の方については、そこでも少しだけ、やっぱり粗くしか触れていませんが。

それからギデンズとの関係ですが、僕が根底においているのは、世界のあらゆる地域の民衆の自立と自己開放、ということです。このことから考えていけば、ギデンズのような結論にはならないと思う。ギデンズは（少なくともこの場合）、一方的に「近代社会」の側から、インクルージョン（包摂）とかエクスクルージョン（排除）を考えるから、ああいう結論になる。「近代社会」の底が割れた、というところから事態が発生していることの意味を明晰に理解していない。つまり「近代社会」の全体を相対化する視界からしか、解決は見えてこないということがわかっていない。

市民社会のルール原則を国際関係の中にもつくり上げる

加藤　では竹田さんお願いします。橋爪さんから質問が出ていたと思います。

竹田　橋爪さんの言われることはよくわかります。一人一票でその社会のあり方を決定していくという原則、つまり自由で対等な個人を前提とした社会の原則だけでは、国際社会の問題は解決できない面があるというのはその通りですね。僕なりにその理由を言うと、ルール社会原則は、現在のところは一社会一国家の内側でだけしか確保されないからです。

先進国では、実質はともあれ基本としてはルール社会原則が成り立っている。しかし国家間にはこのルール原則はまだ存在しない。これが根本的な問題です。そして実は、この問題は一社会内部でのルール社会原則にも本質的な影響を及ぼしている。なぜなら、国家同士はほとんどルールなしに利害競争を行っている。だから各国家は、競争に負けてはならないという外的な原理を抱え込まざるをえない。近代のナショナリズム国家はみなそうだったけれど、どこも富国強兵策を取らざるをえず、したがって過大な権力の集中を行わざるをえない。そこから近代国民国家はもとの市民社会原則を通り越して、必ず中央集権型のナショナリズム権力国家になった。ですから二つの問題があると思います。

一つは国際関係に、市民社会理念によるルール原則をいかに少しずつつくり上げていくかという課題です。例えばかつてカントが説いた「永久平和」説を、ヘーゲルは『法哲学講義』で批判しました。カントの気持ちはわかるが、現在、国家同士の間にはホッブスの言う「万人の万人による戦争状態」しか存在しない。ここにはまだ共存の「原理」が存在しない。その原理をつくり出す前に理想を言っても絵空事だ、というのです。ヘーゲルはそれについてまだ絶望的な見方をしていた。

しかし僕の考えでは、その可能性の原理は、どれほど遠くて困難な道のりであっても、市民社会のルール原則を国際関係の中にもつくり上げる、ということ以外にはないと思います。それ以外には原理はない。それはひどく難しそうに見えるけれど、例えば、先進国はいまほとんど民主主義政治になり、国民の生活レベルは何やかや言ううちに大きく上がり、そのことで、もう先進国同士が戦争で利害競争をすることは完全に不可能になっている。そういう条件は少しずつ進んでいる。だからその条件の原理を取り出すことが重要です。

もう一つは、国家同士の武力での競合が、単なる経済競争になり、それもブロック単位で資本主義体制を回していく協調路線になってきたことの持つ大きな意味は、近代国家が過大な権力集中を正当化できなくなってきたということです。これも重要なことです。国際的なルールが少しずつ形成されるに応じて、個々の国家は、国家権力をミニマム権力、ミニマムルール（自由なルールゲームを運用するのに必要最小限の権力とルール）のあり方に近づかざるをえない。権力集中を正当化する要素が下がっていくからです。ですから、一方で格差を縮小していくプランが必要ですが、基本はルール社会原則を一社会内から国家関係に拡大していけるその条件を少しずつ作り出すということです。そのことが、個々の国がルール社会原則を成熟させる不可欠の条件にもなっている。二つのことは条件を支え合っていて、これだけが可能な方向性だと思います。

「アメリカではない」というメリット

橋爪　国際社会が一人一票のルール主義と相似かどうかということですけれども、国際社会でいま言うグローバライゼーションとは、いくつか要素がありますけれど、アメリカのスタンダードを広めるということと、市場経済ということですね。少しやってみてわかるのは、テクノロジーギャップが大きいわけです。いままで何百年か資本主義をやってきたところには、膨大な情報や資本が蓄積されていて、それが生産財になっているわけだから、ゲームの上ではとても有利で、ますます富が蓄積する。このままで、果たして第三世界がそのうち浮上するかどうかはよくわからないんですね。

そこで日本のスタンスということですけれど、日本は旧大陸に属し、アメリカ化したけれどもまだ発展途上国や第三世界に近い。つまり資源効率が高く、貧乏の記憶を持っている社会です。アメリカン・スタンダードじゃなくて、ジャパニーズ・スタンダードをもし発明できれば、資源効率は倍になって、日本並みの先進国になる人たちは、アメリカ並みの先進国になる人の少なくとも倍になるという、こういう戦略的メリットが日本にはあるわけです。アメリカにはアメリカであるというメリットはあるが、日本にはアメリカでないというメリットがある。この戦略的意味をよく自覚して、情報をつくり出すというのが、竹田さんの一人一票に加えて、私の提案です。

世界を構想する

見田　「知識人」という言葉は好きではないんですけれども、何と言ったらいいかわからないのですが、そういう人たちの大事なことは、昔はいわば、社会の不満を代弁するみたいなことが知識人だといわれていたけど、そうではなくて、大事なことは世界を構想することなんだと。どういうふうにしたら本当にいい世界ができるんだということを、構想することが大事なんだということは、今日の討論の中で、あまり目立たなかったけど大事なこととして確認したいと思います。

今日の討論だけではなくて、9・11のテロやその後の状況が、まさにそういうことを示しているので、社会の不満を代弁することも大事だし、批判することも大事ですけど、それだけだと解決にならないわけです。どういうふうな社会にしたらそういうことはなくなるのか、ということを正面から考えないとだめだという、つまり〈不満の代弁〉ではなくて〈世界の構想〉ということを、大事なこととして取り出しておきたいと思います。

（構成＝編集部・松本一弥）